

要は人 必要なのは緊張感

「相模原から来ていただいていたいへん恐縮です。何でも聞いてください。私は全部オープンですから」。

緊張した面持ちで永田町・衆議院第一議員会館を訪ねた私たちを、藤井さんは笑顔で引き入れてくれました。

テレビの国会中継では、前防衛事務次官の証人喚問。国会は私たちの生活に密着する政治を決めていくところですが、議員やその周辺の人たちを見ていると、本当に私たちの生活を良くしてくれる気があるのか、と疑問を抱きます。頑張っている人が報われない格差社会。「官から民へ」の大号令は、私たちの暮らしに負担を増やしている部分もあります。

政治とは、政治家とは、一体何なのだろう。そんな思いを、地元選出の民主党・藤井裕久衆議院議員にぶつけてみよう、と、藤井さんへのインタビューを企画しました。

平和なくして繁栄もなし

アゴラ山田 藤井さんは45歳で参議院選挙に出馬されましたが、国会議員になろうとした動機を教えてください。

藤井 人に言われたからです。私はサラリーマンとして昭和30年（1955）に大蔵大臣に入りました。

昭和49年（1974）、上司だった鳩山威一郎氏（鳩山幹事長、鳩山法務大臣の父）が参議院全国区に出ました。そして私にこう言った。「政治の世界も役所と同じで年功序列なんだ、君、政治家になる気が少しでもあれば遅くてはだめだよ」と。

でも私は政治家になる気は少しもありませんでした。ですが、鳩山さんの強い要請があり、最後に母親に「これは天命と思いなさい」と言われ、受けたんです。

山田 出馬されたとき、こういう議員になろう、こんな国にしよう、という思いはありましたか。

藤井 「やるからには」と思いましたね。最大の問題は平和です。

私は昭和19年（1944）、小学校6年で東京都小平市に学童疎開しました。疎開先のすぐ側に中島飛行機という飛行機会社があった。B29がそこに爆弾を落とすにきた。そのB29に帝都防衛隊に飛行機が体当たりしたんです。B29は真っ二つ。日本の戦闘機は火を噴いて墜ちてきて、飛び降りたパイロットはパラシュートに火がついてそのまま亡くなりました。中学に進学するので学童疎開から東京に帰って来たら東京で三度の空襲があった。隣まで焼けて友達もずいぶん亡くしました。その時防空壕で、「仮に生き長らえたなら、こういう社会だけはつくっちゃいけない」と心に誓ったんです。

昭和51年（1976）に大蔵省を辞め、いざ議員になるという時、あの時のことがメラメラと蘇ってきました。永年在職議員の表彰（2007年、参議院も含め国会議員25年で河野議長から表彰）をいただいたときの謝辞にも、「平和なくしては経済の繁栄も社会保障の充実もありません」ということを書きました。これは私の実感です。

今平和が続いていますからね、空気みたいになっているんです。しかし戦前の平和が崩れたのはちょっとしたことの積み上げですから。安倍晋三という人が出たのはその一例に思えます早く辞めて良かった。安倍総理大臣という人は戦後 60 年で一番間違った方向を目指した総理大臣だと、私は信念をもって思う。

「環境の権利・義務」と「情報を求める権利」を憲法に

山田 今の憲法が公布された時、藤井さんは 14 歳でしたね。どのような気持ちで新しい憲法を受けとめましたか。

藤井 14 歳というあまりそういうことは分からないですよ。国会でいろいろ騒いでいたのは薄々分かりましたが、とにかく食うためにいっぱいでしたから。

ですがその後、だんだんと史実が分かってきた。この憲法はアメリカがつくったことは間違いありません。憲法を国会に出した時の総理大臣・吉田茂は、その憲法の考え方を日本の中に定着させた。だから吉田茂は護憲論者と言っていいと思います。戦後の憲法をつくる時の総理大臣・幣原喜重郎は戦前の外務大臣をやって平和外交をやった。あくまでも軍人・軍と闘った人です。この二人、元は外務省の役人ですが、二人とも平和主義者・自由主義者です。アメリカのつくった憲法を素直に受けとめたと思う。

山田 今の憲法改正の動きをどう思いますか。

藤井 今の憲法は 60 年経っていますから金科玉条である必要はないと思っています。

昭和 47 年（1972）ストックホルムで国連の人間環境会議が行われた。そこで、環境権とか、環境の義務などがはっきり出た。環境を憲法に書かなくてはいけないと、ドイツ、スイスは憲法を改正しています。それに比べて日本は断固護憲ですから、そういうことも書けない。それが一つ。

それと情報公開の権利、これは大事なことだと思う。情報を知ることが民主主義の根幹なのに、今日本の政府は非常にものを隠す。テロ特措法、給油の話も隠しますから。知らなくては民主主義は育たない。情報開示の権利というのがあるはずなんです。

憲法というすぐ九条と言う。九条も大事ですが、環境の権利および環境を守る義務、情報を求める権利、こういうものを憲法で書くべきだと思います。そういう意味で私は改憲は是だと思っています。

山田 追加していくという考えではなく、改正なんですね。

藤井 全部見直した方がいいと思っています。だからこの前の国民投票法は私は心の中では賛成です。手続き法がない国はない。これは日本人の権利を奪っている。憲法の中に憲法を改正する権利が国民にあることは書いてある。それなのに、その手続きをつくらないというのはむしろおかしい。手続きはつくる、でも内容は別問題、ということです。安倍さんたちが考えている内容はとても許せません。

流されず現実をしっかりと見る

アゴラ格地 安倍さんは自分の代で憲法を変えると明言していたので、私たちも焦りました。国民投票というのは私たちに問われることなので、その時に分からないではすま

れない話ですよ。ですから私たちも憲法の勉強を始めました。

藤井 その通りです。もう少し言うならば投票法は国民の権利だからなければおかしい。でも、安倍さんはそれに乗かって彼の考えている間違っただけの憲法改正を出してきた。

総理大臣というのは偉いですからね、日本人の多くの人たちは残念ながらそれに乗ってしまうんです。たとえば、安倍さんの時代だから「沖縄の集団自決を軍が命令したというのは嘘だ」という話も出てくるんです。それまで誰もそんなことを言っていなかった。ムードです。あの人が総理大臣になるとそういうムードに迎合する人たちが出てくる。文部省の役人なり、審議会の審議員なり、教科書会社なりがみんな流れる。総理大臣が言うと反発する人もいる反面、「そうじゃないの」という人も増える。だから安倍さんの時代に投票法はいけないというのが私の意見なんです。

格地 「首相がこう言ったから」と言う人がいますが、首相の周囲の大臣たち、審議会の人たちが何のためにいるのか、そこで自浄作用が働かなければその組織そのものがダメなんじゃないかと思えます。

藤井 そうなんです。アメリカの方がもっと利口だと思いますね。もうブッシュを許していないでしょ。「アメリカはいい国だけど今の大統領はダメだ」と、その見方をはっきりさせなくてはいけない。アメリカではそういうところははっきりさせています。初代の国務長官・パウエルが「イラクに攻撃をしたのは自分の一生の不覚だ」と言っているんです。辞めたからではあるけれど、ブッシュの下にいた人間が、すぐにそういうことをアメリカ全国民に言っている。

日本はこういうアメリカを見習うべきです。昔の政治家の中には、「総理それではダメですよ」と言って、辞表を叩きつけた人が何人もいますよ。大臣にそういう人がいなくなってしまうんです。

二世・三世議員の影響は非常にありますよ。信念をもっていませんから。周りが政治家だったから政治家になっちゃった、ということですよ。残念に思うのは、有権者の方々が「あいつの息子だから入れてやる」というのはどういうことかと。アメリカを見習うべきです。アメリカ人の全体のもっている底の深さ。ちゃんと中間選挙でブッシュを否認したじゃないですか。

格地 憲法の話に戻りますが、民主国家をつくっていかうということが憲法で高々と謳われていて、私は一番最初にそういう教育を受けました。すんなりとそれを受けとめられたのに、それがどうしてこんな社会になってしまったのかと思うのですが。

藤井 残念ですね。いろんな要因があると思いますが、社会が平和惚けをしてしまっているんです。社会に対して緊張感がなくなってしまう。「こういう社会になってしまった、だから変えよう」という意識を常に自分たちがもつことが必要です。日本人にそういう方もいらっしゃる。日本にも立派な方はいらっしゃる。ただ、残念ながら、今の日本では力にならない。

小泉・安倍首相は決定的な誤りを

アゴラ菅澤 日本は戦後いろんな選択をしてきて、それなりの功罪もありました。しかし、生活する市民の目を見て、ここに来て政治がおかしい、民主主義がおかしい、と感じます。ここ何年かの間に、今までにない大きな選択の間違いがあるんじゃないかと不安に

思うんですが。

藤井 今までの総理大臣の中にもいろいろな人がいますが、小泉さんと安倍さんほど極端に日本を悪くした人はいない。今までの総理はそれなりに平和だとかそういうことは守っていたんです。それが小泉さんになって何をしたかと言うと、極端な市場原理主義ですよ。グローバリゼーションというのは否定できないと思う。例えばイチローが50億円稼いだっていいですよ。グローバリゼーションのプラス効果です。だけどね、小泉さんがやったのはマイナスのグローバリゼーションです。

比叡山の開山の祖・伝教大師が「一隅を照らすこれ国の宝なり」と言っている。大言壮語なんてしないでいいですよ。家庭のためを思い、会社のためを思い、地域のためを思う人が国の宝だと、これが伝教大師の言葉です。

小泉政策というのはこれを疎外してしまっているんです。そういうことが白書で出ています。政府の労働経済白書では、この10年間で大きな所の企業利益は2倍になりました、配当は4倍になりました、人件費の伸びはゼロ、と報告されています。法人企業統計では、2006年、配当は40%増えました、月給は1.6%増えました、また、所得200万円未満の人が1000万人を超えました、とあるんです。戦後そんなことになった時代はないんですよ。所得200万円未満の人が1000万人を超えたということは、上から落ちたということです。それが小泉政策です。安倍さんはそれを全く直さない。福田さんも残念ながら直していません。

安倍さんの間違いはもう一つ、経済の問題以上に日本の方向を誤っているということなんです。福田さんは同じ党ですからこれが限界なんだろうが、安倍さんが言った「戦後レジウムの脱却」ということをうちの議員が福田さんに質問したら、「あの意味が分からない」と。「意味が分からない」じゃ困るんです。「あれは否定する」と言ってもらいたかった。でも「意味が分からない」ということは本当は否定しているんでしょう。民主主義を育てたのが戦後レジウムです。それを脱却するとはどういうことですかね。全体主義に戻るんですかね。小泉・安倍両氏は経済面と政治面において、それまでに無かった決定的な誤りを犯している。「ここに来て何だかおかしい」というのは、私に言わせればそういうことです。

菅澤 政治の選択が間違っていた。でも、もっと言えば、生活する人がそういう政治を選択する余地を与えたということですね。

藤井 それはね、平成17年(2005)の郵政選挙、私たちはあの郵政選挙に負けました。相模原のみなさんに応援していただいて票を増やしていただいたけど負けました。

あの時私は、「郵政もいいかもしれないけど、もっと大事なことは年金だ」と言いました。平成16年(2004)の年金改革の、「100年安心」なんていうことは大嘘だと言って歩いたんですけど。ずいぶんまじめに聞いてくださった方もありますが、それ以上にあのムードに負けました。

年金はこれから毎年毎年保険料を上げると言うんですよ。出生率が落ちたら年金まで切ってしまうと言うんです。「100年安心」なんじゃないかな。

一つひとつの格差を具体的に

山田 この格差がある状態をどのように変えることができるのでしょうか。

藤井 小泉政策の間違いをもう少し具体的に言うと雇用政策です。どういうことかと言うと、いろんな雇用形態があることまではいいんです。しかしそれを経営者たちが月給引き下げに使った。それまで正規社員だった人がいきなり非正規社員にされ、同じ仕事をしているのに、月給をそこで切られてしまった。非正規社員になったら賃金を落とすということを許したのが小泉さんなんですよ。いろんな形態にするのはいいんですけど、そこを全く無視しているということが一つです。

次に年金。年金は、あんな「100年安心」はダメだということです。年金は所得比例ですから、少ししか払わない人は少ししかもらえない。でも、それではダメだから、そういう方々を中心に最低保障を補正することも大切だと思いますね。

それから税です。小泉さんの時、法人税は安くするけれど、個人所得税は大増税でしょ。1兆4000億円法人税を減税して、3兆9000億円個人所得税を増税、その上に社会保障のいろんな負担を増やしているわけですよ。税というのは政治そのものはずなんです。税は技術論だけではないんです。私たちはそういうことをひっくり返していくつもりです。

そして地方分権、都市と地方との格差です。小泉さんのやったことは、とにかく補助金だろうと何だろうと切ったわけです。都市と地方との関係を直すには、どうしても財政調整という手段が必要なんですよ。これは昭和の初期からやっていることなんです。しかし小泉さんはそういうことはやらないで、とにかく地方に行く金を切ったんです。補助金も交付金も切りました、これを直します。

地方との不平等、働く人の年金、雇用のあり方……、それらを一つ一つ直さなくてははいけないと思います。抽象論では無く、具体論だと思います。

「権力は腐敗する」

山田 政治というのは国民一人ひとりの生活のためにあるものだと思いますが、現実を見ていると政治家というのはどこを向いてやっているのだろうと。

藤井 これは緊張感がなくなったからです。その一つは一党独裁。

民主主義の母国、二大政党制のイギリスには、アクトン卿という歴史家がいるんです。アクトン卿は「権力は腐敗する」ということを言っているんですよ。権力の腐敗というのは、第一には金。でも金だけではなく、政策でも腐敗するんです。

つまり、あんまり世の中の人のことを考えなくても、適当にうまく回っていくということなんです。特に二世・三世議員はそれなんです。最初から叩き上げてきたり、サラリーマンをやってきたり、苦しい思いをした政治家ならまだいいんですが、いい思いをした政治家の息子なんていうのは生活している人たちのことがわからないんです。安倍さんなんか典型ですね。貧乏な政治家の息子もいますからね、私は二世が全部ダメとはいいませんけど、そういうことだと思います。

今の日本は、政治家に緊張感がなくて、一党の独裁で腐敗しているということです。一党独裁の中には政策の腐敗もあるし、二世・三世の問題とも相当密接に絡んでいると思います。

地方分権 —— 地方議員はファイナルな責任者に

菅澤 分権のことで言いますと、相模原は政令指定都市を目ざして動き出しています。私たちは今、合併によりさまざまな場面でどういうことが起きているか、津久井四町との差を調べています。行政もそういうことをやってきたはずなんですけど、それが現場に降

りてきていないのを実感するんです。都市内分権、それぞれの地域が自立するというのはとってもいいことのはずなんですが、現実はその考え方が現場に降りてきていない。腐敗というか緊張感のなさに繋がっているんじゃないかと感じます。

藤井 市議員というのは、本当はもっと大事な仕事なんですよ。立派な人が何人かいることを私は知っていますから全部とは言いません。しかし、「ただいだけじゃないの」、という人が多すぎると思う。ただいだけの人はいなくなっていいんですよ。相模原だけではなく、全国的なことですよ。人によっては自治会長の方が立派なことをやっていますよ。

地方の問題は地方だけでやるという仕組みを、今少しずつやっています。でも、その受け皿になるべき人が、分権と言われてもそれに応える力がない。国に命令された方がやりやすいと言うんです。

格地 何かあった時、「国でこう決めたからゴメンよ」って簡単に言うことができますね。

藤井 それ。それを言わせちゃいけないんですが、今の仕組みにはまだそういう傾向がありますから。それは国の責任もありますね。まだ補助金なんて言っているんだから。補助金はやめて一括してとにかくあげなさい、その中で好きにやってもらう、というのが私たちの考えです。そのお金を道路に回すか、福祉に回すか、それは地域の市民の代表が決めればいいことじゃないかと。

ですが、まだ国がそうなりきっていませんし、多くの方が今までの惰性に慣れきってしまっている。また、今おっしゃった言葉、「国が」とか、「補助金くれませんか」と言う。「ご自由に」、となった時、市民の方が「どうしてこういう分け方をしているのか?」「どうしてこういう使い方をしているのか?」と言っただけならば、市議会議員がファイナルな責任者になる、彼らをファイナルな責任者にすることが大事なんですよ。また、それが本当の分権なんです。

菅澤 どこにも緊張感がない、ということはすごくよく分かります。どのレベルでもそうになっています。それが現場で「アレ?」と思うようなことに繋がっているということですよ。今日は、県議員・市議員に何を期待するかも伺おうと思ったのですが、それは、議員はその地域の実情を深く理解したファイナルな責任者になれ、ということですね。

未来から考える

菅澤 今の行政は、「みんなが公共の担い手です、パートナーとして一緒にやりましょう」と言います。でも、分権のお金をちゃんと渡さない図式と同じで、「公のことは行政がやるものだ」という思いから抜け出せないでいる。私たちの側も補助金をもらっていると、もらい続けていることが当たり前になってしまう。私たちも、自分たちの責任でやる、という緊張感をなくしているんだなと、お話をうかがっていて感じます。

藤井 今あなたが言った中には、物事を「もうこうなったらしょうがない」とか延長戦で考えるような発想があるんですよ。今までもこうだったからこうだと。延長戦で考えている限りは世の中は絶対によくならない。「何が一番いい世の中なのかな」、ということを考えて、「そうになってないね、じゃあどこから直していこうか」、と発想することが大事なんです。

過去からの延長でものを考えたら世の中は悪いほうに悪いほうに行きます。日本の戦争

がそうなんだから。「満州事変やっちゃった、満州をとっちゃったらしょうがない」とか「盧溝橋事件やって南京までとっちゃった。しょうがないや、やっちゃったんだもん」と、一番大きな話はそれです。しかし、そんな戦争までいなくても身の周りのことでもそんなんですね。

私は選挙をやっていた頃、「未来から考えようよ」とよく言っていました。未来から現在をどう考えるかということによって、今をどう直すかをすべきで、過去にこうやってきたからちょっと手直ししよう、というのは改革ではないんです。

「戦争を学べ」…… 若い政治家へ

菅澤 いい話です。藤井さんに聞きたかったのは戦後の政治、その延長の今の政治の状況、そこから藤井さんは何を伝えたいかだったんです。地べたで起こっていることと、政治家が言うこと、やることにすごく距離感があると感じます。

藤井 距離のある人たちは勉強していないからです。彼らはすぐに英語を使う、これが一番いけない。もっと話し合いの言葉で喋るだけで距離感は縮まるんです。政治家の、できの悪いのに限って英語や難しい言葉を使うでしょう。英語や難しい言葉を使う人を見たら、あれは勉強していないと思ってくださいよ。実感なんです。私は難しい言葉を使わないようにしているんですよ。

菅澤 それは若い政治家に伝えたいメッセージの一つですか。

藤井 最大のことは、「あなたたちは戦争を経験していない、経験することはできないから勉強してくれ」ということですね。

うちの党では近現代史調査会というのをやっているんです。学校で言うとゼミナールみたいなものです。講師が話をして、そのあと議員がフリートーキングをするんです。それを集めて『歴史をつくるもの』という上下二巻の本をつくりました。読者の感想には、「政治家ってこんなことまでできるのか」とか「こんな議論ができるのか」とありました。だからそういう議員もいるんです。

私は角栄さん時代秘書官でした（田中角栄内閣時代、二階堂進内閣官房長官秘書官）。角栄さんはこう言われた。「戦争を知っている人が社会の中核である限り、日本は絶対安全だ。戦争を知らない人が社会の中核になった時、日本は恐いな。だけどそれは勉強してもらえればいいやな」と。

角栄さんは騎兵上等兵で満州に行ったんです。そしていかに関東軍というのが間違いを犯したのか、いかに軍規が乱れているか、ということを感じたんですね。上等兵で行ったから分かるんです。将軍なんかで行ったら分かりはしない。

私が次の世代に引き継ぎたいのはやっぱりそれですね。平和であれば、それなりのことはできるんです。平和でなければ経済の繁栄もないし、社会保障の充実もないんだと、そういうことですね。

自らの判断で自らの行動ができる人を

山田 この任期を終えたら引退をなさると聞いていますが、その後、政治とどのように関わっていくお考えですか。

藤井 前回の選挙で負けた時、私はもう天命だと思いました。今回復活したのは前の選挙の延長の話ですから。でもこれは、「だからまたやる」という話とは違うんです。ただし、生ある限り世の中のために尽くしたいと思うし、幸いテレビ局からの出演依頼もありますからテレビにも出ます。テレビの影響力は非常に大きいですからね。党にもそれなりの役割を果たさせていただきます。何も国会に出て質問するだけが、これからの世の中を良くすることじゃありませんから。人を育てるのも役割ですし、世の中の方に直接訴えるのも役割ですから、それは生涯やるつもりです。

格地 私はずっと社会教育に関わっています。自分の頭で国のあり方とか暮らしのことを考える力をつけようというのが社会教育だと思うんです。今それが非常に弱くなって見えにくくなっています。でも、やはり、一人ひとりが自分の頭で判断できる自立した人間でありたいと思います。人を育てることは非常に大事なことだと思います。ぜひいつまでもお元気でいてください。

藤井 私は講義に行って、これからの日本をテーマに話をする時、一番先に言うことは「自分でものを考え、自分で判断のできる人を育てる」ということです。ただし、素朴な人間のあり方も知ってもらいたい。その上にたって自らの判断で自らの行動ができる人になってもらいたい。私は慶応大学ではありませんけど、それは福沢諭吉の言う「独立自尊」ということですね。

山田 最後に座右の銘を教えてください。

藤井 初心忘るべからず。